

夜明けの富山湾(富山県氷見市から)

朝の四時半に外を眺めると 富山湾に北アルプスの絶景があつた

一緒に暮らしている孫との夏旅は、能登半島にした。フェリーで新潟に到着してから北陸自動車道をひた走り、富山市内のホテルに着いたのは、夕方の六時頃であつた。

路面電車が走行し、富山城の天守閣が絵になつている市街地は、コンパクトシティの先進地として全国から注目されているのだ。

夏の味覚を楽しみたいと、観光ガイドに掲載されていた割烹で、白海老と庄川の鮎をオーダーした。「富山湾の宝石」といわれる白海老は、ほんのりと甘くビールとの相性が抜群であつた。庄川鮎の塩焼きは、北アルプスから流れ下る冷たい水に影響され、小ぶりでもとても美味しかった。翌日、氷見の露天風呂で会つた地元の人々は、「庄

川の鮎はうまい、一度に八匹ほど食べる」と自慢げに語っていた。

石川県七尾市にある「のとしま水族館」を楽しんでから、県境に近い氷見灘浦温泉に宿泊した。目前に富山湾の風景が広がり、日が暮れると対岸に連なる黒部、富山、高岡などの夜景が見えた。翌朝、四時半に起きて外を見ると、富山湾に北アルプスの絶景があつたのだ。立山、剱岳などの稜線が見渡せ、穏やかな海面では、仕掛けた網に船が走り寄る。風土を意識させる絶景なのだ。

同じ雪国で日本海側にありながら、秋田とは何かが違う。それは、伝統文化を受け継ぎ現代社会に調和させる県民性の

違いなのか。コンパクトシティづくりは、市民の理解と協力を得て進行していく。北前船の寄港した街を守りながら居住性と利便性を高めた「富山ライトレール」の開発や、富山新港の巨大な「新湊大橋」の建設などは、時代を先取りして見事なものだ。そして、五箇山の合掌造りへ行く途中で眺めた砺波平野の「散居村」は、広く美しく、自給自足を連想させる懐かしい農村風景であつた。

富山県には北陸新幹線の利便性もあり、首都圏から多くの人たちが来ている。間もなく新幹線が大阪に繋がると、観光客と移住者は増えていくであろう。北陸の旅は楽しい。